



紹介者

**安部 和志**

ソニーグループ  
執行役専務

**倉橋 隆文**

SmartHR  
取締役COO



## AI活用の可能性と難しさ

ITスタートアップの経営をしている中で、同業他社の経営者仲間と話す際に、ここ数年挙がり続けている話題がAIの活用についてです。

生成AIを中心としたAIが大きな変化をもたらしつつあります。技術者ではない私が理解している生成AIのすごさは「自然言語での指示を理解してくれる」ことと、「指示に従った自然な文章・画像などを生成してくれる」ことです。イメージとしては「作業が異様に速い若手が常に付いていてくれて、言葉で指示すると、素案をすぐに出してくれる。ただたまに間違えもする」という存在です。マイクロソフトなどの大手が自社のAIサービスを「Copilot（副操縦士）」と名付けているのも言い得て妙と感じています。

大きな可能性を持つ生成AIですが、IT企業経営者と話していても自社サービスへの組み込み方法はまだ手探りの段階だと感じています。私が感じているAI活用の難しさの一つは、「大多数の人間はコンピューターに自然言語で指示することに慣れるのか」という入力手法の壁です。私自身、数年前に音声入力が盛り上がった時期は「Hey Siri」や「OK Google」と言ったりしたのですが、今では「朝食を準備しながら今日の天気を聞く」といった限定的なシーンでしか利用しなくなりました。検索は、キーワードを指でタイプした方が楽なのです。もう一つの難しさは「AIが作った生成物は、無味無臭になりがち」という出力側の特性です。そもそもAIが膨大な教師データから「最も確からしい言葉をつなげる」ようにして作られているので、このような特性を持ってしまう。実は、本エッセイも最初はAIに下書きしてもらおうと思ったのですが、私の指示力ではあまりに味気ない文章しか生成できなかったもので、結局ゼロから自分で書いています。例えば「問い合わせ対応」などは、先述のAIの二つの特性とマッチしているのですが、それ以外の大きなユースケースを見つけることにまだまだ試行錯誤中なのが現状かと思います。難しさもありますが、AI技術そのものが現在もすごい勢いで進化していますし、技術革新の波をうまくつかんだ者が市場でのポジションを一気に上げるのは世の常かと思います。経営者仲間とのAI議論は、しばらく続きそうです。

▶▶ 次回リレートーク

**神宮 由紀**

フューチャー  
取締役